

公益財団法人 日本財団 御中

一般社団法人 御代田の根  
2021年度 開設/運営事業 活動報告書

2022.11.15

## はじめに

御代田の根は、2021年度 コミュニティモデル型の子ども第三の居場所事業の助成を受け、子どもと大人が一緒になって身近に触れられる自然を感じ、自然の恵みを暮らしに役立てながら生きることが持続可能なコミュニティにつながるとの考えを中心に据えて「みよたの広場」の開設・運営事業を進めてきた。

誰かの手によって完成され、提供される広場ではなく、かかわる人たちで作り続け、改善しながら使っていく広場にすることを念頭に置き、次の3点を掲げて場づくりを行なっている。

- 広場が子どもも大人も過ごせる居場所となること
- よい循環を生み出す拠点となること
- 新たな関係を結びなおす場となること

本活動報告書では、上記3点の達成のための場づくりやこれまでの取り組みを報告する。



 <p><b>子どもも大人も 過ごせる居場所</b></p> <p>誰にとっても、居場所は多に越したことはありません。子どもたちの居場所になると同時に、その成長を見守るあらゆる大人たちの居場所にもなることを目指しています。</p>	 <p><b>よい循環を 生み出す拠点</b></p> <p>自然が生み出すものから、人間が生み出すものまで。さまざまな資源が、地域の中でよりよく活用され、循環するための拠点になることを志向し、運営しています。</p>	 <p><b>新たな関係を 結びなおす場</b></p> <p>世界は関係でできています。この場所ですさまざまな人や資源が交わることで、共にある人と人、人と自然とが、新たな関係を結びなおしていけるような場にしたいと考えています。</p>
--	--	---

## 場づくり/取り組み

目的を達成するためのこれまでの取り組みについて、①広場の構造物/グランドデザイン、②建設プロセスのデザイン、③イベント企画の3つに分類し、場づくりの考え方や現時点で得られている成果を報告する

### 1. 広場の構造物

みよたの広場は、メインの建築物が存在せず、複数のモバイルハウスが点在する”半屋外型”の拠点となっている。巨大なウッドデッキとその中心に配置されたオープンストーブ、それらを取り囲むように配置されたキッチントレーラー・リビングトレーラーが存在するエリアと、トイレトレーラー、プレイトレーラー、ワークトレーラーなど異なる機能を持つトレーラーが点在するエリア、冬に暖をとりながら子どもたちを見守ることができるあったかベンチ、よい循環を生み出すために重要な役割を担う資材置き場により構成される。広場の中心には丸太を敷き詰めた木道が通り、その先には町の中心部に繋がる橋がかかっている。

広場を構成する構造物の概要と意図を説明する。

### 広場全体Map



## 各種構造物の説明

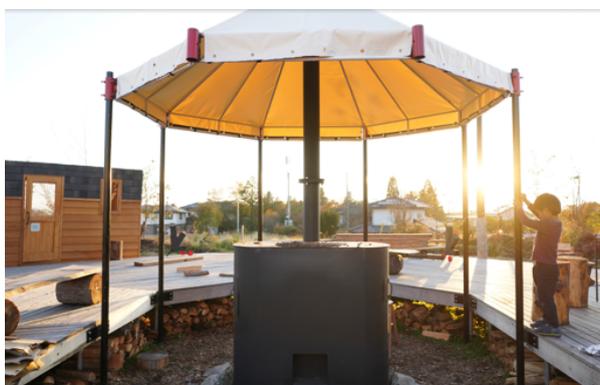
### 【ウッドデッキ】

広場のシンボリックな存在感の巨大なウッドデッキ  
複数の小さなモジュールで構成されており、人力で動かすことが可能な設計となっている。広場に関わる方々からのニーズや広場の利用方法の変化に応じて形を変えられる仕様になっている。使用した木材は近隣の森で自分達で伐採したカラマツを使用し、地域の方々を巻き込んだワークショップ形式で大人も子どもも参加して製作した(「2. 建設プロセスのデザイン」で後述)



### 【オーブンストープ+テント】

ウッドデッキの中心部に存在する鉄製の構造物  
屋外薪ストーブとして暖を取ることができ、構造物上面の鉄板・左右に配置されたオープンスペースで調理ができる。燃料に薪を採用することで、地域内で余った木材をエネルギーとして活用し、資源の循環を促す。子どもたちが自然資源を暮らしの中で活かす知恵を学べる空間となることを目指している。  
オーブンストープの上部には八角形のテントが配置されており、屋外でも日除け・雨よげができるよう配慮している。子どもを見守る大人たちが集う空間になり、コミュニケーションが促進されやすくなるよう工夫している



### 【キッチントレーラー】

#### キッチン仕様のトレーラー

定期的に開催しているランチ会やディナーイベントなどで調理を行うことができる設備を備えている。通常は、「みよたの喫茶」としてカフェ営業をしており、コーヒーや紅茶、おやつなどを提供している。子育て世代だけでなく、地域の老若男女が来なくなるコミュニティカフェとしての機能を担う。みよたの喫茶には、「みまもりドリンク」という独自のメニューがあり、子どものみまもりの他、広場のために「なにか」をしていただける方には無料でコーヒーやドリンクを提供している。(例えば薪割りをしてくれた方に、ドリンクを無料で提供するなど)地域の方々を巻き込みながら、広場に関わってくださる方の主体性を引き出すための工夫としてこのような取り組みを行っている。



### 【リビングトレーラー】

#### 屋外中心のみよたの広場における数少ない屋内スペース

内部には、近隣の方から寄付いただいた本棚や絵本、ラグやクッションが入って快適に過ごすことができる。長机も設置されており、宿題をしたり、本を読んだり、ゲームをしたり、wifiでパソコン作業をしたり、子どもも大人もゆっくり思い思いに過ごせる空間となっている。



### 【ワークトレーラー】

出入り口と大きな窓の開口部が特徴の小型トレーラー

現時点では明確な用途を定めず、あえて内装を作り込まずに残している。広場の運営に主体的に参画する方々と議論を重ねる一つのテーマとして、このトレーラーをどう活用していくかを考え、意思決定していく



### 【トイレトレーラー】

トイレ機能を担うトレーラー

乳幼児の利用者も想定し、おむつ替えの台も備えている



### 【プレイトレーラー】

子どもたちがジャングルジムのような使い方をしているトレーラー  
子どもの創造性を養うためにもわかりやすい遊具は設置していないが、広場に遊びに来る子どもたち、親御さんと議論し、このトレーラーを核として柔軟な遊びができるよう拡張していく。具体的には滑り台にもなる箱を連結し、仕上げの板張り作業をワークショップ形式で実施する



### 【あったかベンチ+テント】

中に入り、暖をとりながら座ることができる構造物  
外側と内部の2箇所に焚き口があり、壁とテントで覆われた空間を温めることができる。オープンストーブと同様に、資源循環・子どもたちへの環境教育を意識している。  
半屋外型の拠点であるため、冬場の寒さに耐えられる空間づくりが重要となる。遊び疲れた子どもたちが暖を取れる居場所となると同時に、子どもたちを連れてきた大人たちが暖を取り、寒さを凌ぎながら子どもの見守りができる”暖かい公園”を実現するための重要な役割を担っている。暖かさを求めて大人たちが集うことで、大人同士のコミュニケーション・繋がりが生まれやすい空間になるようデザインしている



### 【資源置き場】

「き」「いし」「は」など自然資源を分類して保管しておくスペース。  
開所初期の現段階では、広場がよい循環の拠点となるために、資源を集め、活用しようとしていることをアピールする機能を担っている。これから広場に来てくださった方々から資源を受け取り、広場内で何かを生産することで、地域内の資源循環の促進を目指す。自然資源の循環を一つのきっかけに、その他の資源(子供服やおもちゃ、いらなくなった日用品、さまざまな経験やスキルなど)が循環するハブとなることを目指す。



### 【木道と太鼓橋】

広場から町の中心に抜ける道と太鼓橋。  
丸太の木口が見えるように敷き詰められた木道は木の香りがして心地よく、その先のダビンチ構造を基礎とした太鼓橋を超えると町の中心地へ続く道に繋がる。広場が地域の”通り道”になることで、さまざまな人が行き交って混ざり合う場となること、広場を認知する人が増え、子どもたちを見守る目が増えること、広場を介した偶発的な出会いが生まれやすくなることを意識している。

太鼓橋から見える木道と広場(左)



橋の全体像(右)



### 【半屋外型のグランドデザイン】

子どもたちの居場所・遊び場を屋内に限定せず、敷地内全部を子どもの居場所と捉えて広場のデザインを行っている。

子どもたちが敷地全体を使って過ごすことを念頭に置き、さまざまな樹種の植栽を施すことで、子どもたちが自然に囲まれて過ごせる空間づくりを行っている。異なる機能を持った小さなモバイルハウスは、天候や子どもたちの気分に合わせて利用できる居場所となっている。

住民参画型の場づくりを意識しており、柔軟にレイアウト変更ができる設計を意識している。可動式のモバイルハウスを採用しただけでなく、広場の中心に位置する巨大なウッドデッキも細かなパーツの組み合わせた構成にすることで可動性を担保している。



## 【土木作業と植栽】

宅地造成によりガチガチに固まっていた土地を解し、森の土壌に近づけるため、土壌改良のための土木作業を広場全体に施した。

前提として、人工的にガチガチに造成されたこの土地は、状態としては「水と空気の動き」がない状態になっており、「水と空気の動き」を作り出すことが土壌改良の基本的な考え方である。

円形の溝は、「通気浸透水脈」と呼ばれるもの。土を掘ったところに丸太や枝、石や落ち葉などを詰める形につくられ、周囲の土止めには石垣を採用。これにより排水処理性能が向上し、また水脈内に生まれる隙間が空気の流れをつくるとともに生き物の棲家となることを狙っている。敷地全体の外周にも同様の水脈処理を施し、敷地中心部と外周の両方から土壌改良が進む設計になっている。

また水脈の内側は、藁を何十にも重ねた茅葺屋根のような処置を施しており、隙間の多い藁が血管のような働きをすることで、ほんの少しだけ小高くなった中央部との高低差も力として、その外に水と空気の流れをさらに作り出す構造となっている。こうして敷地中央から徐々に周辺の土にも影響が出て全体の土壌環境が改善していく。適切な管理を続けることで、動植物の根、水脈内部の石や有機物、そこに住む微生物などを通った水は御代田の広場の周辺に力のある綺麗な水として滲み出て行くことを理想とした設計になっている。



地域の方々が持て余している有機物(丸太や枝など)をいただき、通気浸透水脈に詰める



## 広場で過ごす子どもや大人の様子

- ❖ 屋外調理をして食事をしながら交流する”オープンディナー”では、子どもたちが調理の手伝いをしてくれたり、配膳役を担当してくれるなどの行動が見られた。半屋外型のオープンスペースであるため、大人たちがしている作業が遊びながらも目に入る。これが子どもたちの自主的な協力を促す一つの要因になっているように思う。子どもたちはさまざまな大人たちに見守られながら過ごしており、また大人たちも自分の子とたまたま遊びに来ている子を分け隔てなく見守っている。子どもにとっても大人にとっても、さまざまな人と接し、関わる力を養う場になりつつある。食事をしながらのコミュニケーションで大人同士の横の繋がりも醸成されている



- ❖ 宿題を持ってきて宿題をする様子も見られた。違う学校/学年の子と一緒に宿題をして、子ども同士で教え合う関係性が生まれている。また、高学年の子が低学年に対して絵本の読み聞かせを行う姿も見られた。  
半屋外を特徴とする広場では、屋外をかけまわる遊びが中心となる。身体性を伴う遊びを通じて緩やかに関係性が育まれた結果がさまざまな形で現れている。

カフェのカウンターで宿題をしてから遊ぶ(左)



小3の女の子が、低学年の子に絵本を読み聞かせる(右)

- ❖ 丁寧な土壌改良により有機物が増えた広場には、多様な樹種の植栽が施されており、子どもたちが季節ごとに表情を変える樹木やさまざまな昆虫に触れる機会となっている。



- ❖ 大量の薪を必要とするさまざまな設備を導入したことで、薪の確保が必須となっている。これを”共同作業日”を設けて実施することで、子供だけでなく大人も巻き込みやすくなっている。同じ空間で身体性を伴う作業を共にすることで、広場を通じて大人同士の繋がりも生まれ始めている



## 2. 建設プロセスのデザイン

建設が完了してから来てもらうのではなく、建設段階から地域住民を積極的に巻き込み、ワークショップ形式での建設を継続的に行った。住民が場づくりに主体的に関わり、そのプロセスを通じて広場が各々にとっての居場所になること、ファンを作ることを目指した。住民に広く声かけをしながら行った建設プロセスの様子およびその効果を紹介する。

### 土木作業/植栽

土木作業や植栽は、教えてもらえれば子どもでも手伝えるシンプルな作業ばかりで、多くの人を巻き込みやすい。身体性を伴う作業を行うことで、参加者は感覚を取り戻し、作業を通じて参加者同士の関係が育まれていく助けになると考えている。建設工事が始まった2月から10月まで継続的に土木作業を実施したため、多くの方々に参加していただくことができた。繰り返し参加してくださる方もいて、場づくりに主体性を持って参画する意志のある方々との関係性を築くことができた。

開催日 : 3/5, 4/29, 5/2, 5/8, 5/24, 6/25, 7/9, 8/26, 9/8, 10/17 (10回)

※複数日連続で開催している場合も1回とカウント

累積参加人数(重複あり) : 170名(子ども73名、大人97名)

土壌改良処理を施した土地に、仕上げのウッドチップを撒く



麦わらの収穫を手伝ってくれた子どもも



麦わらを敷いた水脈に、石を並べる



水脈に詰める石や枝などの資材を仕分ける(左)



休憩中には炊き出しをして、参加者と食事を取りながらコミュニケーションを取る(右)

## ウッドデッキワークショップ

開催日 : 3/12,13(2日間)

参加人数(重複あり) : 41名(子ども20名、大人21名)

施工の難しい骨組み部分は事前に組み立てておき、ウッドデッキ上面の板張りを参加者を募って実施した。子どもも大人も一緒に作業ができる簡単な作業にしたため、子どもも大人も横並びで作業を行うことができた。広場の象徴であるウッドデッキを、その場で遊ぶ子どもやそれを見守る大人たちが自分の手で作ったことで、場づくりの主体となってくれる方々を増やすことができたように思う。また、同じ作業を共にすることで、場に集まった人同士が自然にコミュニケーションを取っている姿が印象的だった。



### あったかストーブベンチワークショップ

あったかストーブ+テントと同じ構造の子供用ストーブにカラフルなモルタルを塗るワークショップを実施した。塗り終わった後に、「ここは自分が塗った場所！」と誇らしげな子どもたちの表情が印象的だった。イベントを通じて広場を知ってくださった方が、その後も広場に日常的に顔を出してくれるようになっている。建設プロセスを開いたことで、オープン前に地域住民の巻き込みを実現できている。

開催日 : 7/9

参加人数 : 25名(子ども11名、大人14名)



### 3. イベント企画

プレオープンフェーズのイベントは、子どもたちの居場所としての認知を高めることを目的として、子ども向けワークショップと大人とのコミュニケーションが取れる企画を実施した。一部のイベントは、「2. 建設プロセスのデザイン」で紹介した内容と重複するため、簡単に紹介する。

#### 子ども向けイベント

連携をお願いしている「みよたぐらし」との共催で、シュタイナー教育講師を招いてのワークショップを企画した。(広場開所前のため、みよたぐらしの拠点にて実施)にじみ絵アート、透ける折り紙アート、毛玉アートと異なるアートワークショップを企画。知り合い経由で子育て世代に声かけし、接点を作るとともに、広場の構想を説明する機会として活用した。

にじみ絵アート



透ける折り紙アート



毛玉アート



## 親子イベント

土壌改良のメソッドの有識者を招いて、居場所のコンセプトである「森との接続」を体現するワークショップを実施した。森を整備し、そこで回収した有機物を第三の居場所の敷地へ戻すことで土壌を改良する。

身体を動かす時間が多く、いつもとはまた違うコミュニケーションが生まれた。大人同士の繋がりを育む時間となった。



ワークショップや作業ではなく、ただただランチを一緒に食べようというカジュアルなイベントも行った。参加のハードルをできるだけ下げ、本棚を設置してピクニックのような雰囲気をつくるなど幅広い方々に参加してもらえるよう工夫した。作業色を少なくしたことによって、赤ちゃん連れなど今までとはまた違う層にもアプローチできた。



## 総括

地域住民の方々を意識的に巻き込む建設プロセスを採用したことで、建設期間中・開所から継続的に地域の方々に利用していただいている。毎日のように遊びに来てくれる小学生や定期的に子どもを連れてきてくれる常連の親御さんにも恵まれ、地域に根付いた活動として動き始めている手応えを感じられている。建設期間中のワークショップに参加して下さった約200名の方々、ランチ会などのイベントで交流できた約700名の方々と開所前からコミュニケーションをとり、私たちの考えや構想を理解していただく機会を継続的に設けられたこと、そこで得られたフィードバックを柔軟に反映してきたことがポジティブな結果として現れていると考える。このように多くの方に関わっていただきながら作り上げ、多様な方々に集っていただける広場になったことで、子どもたちが多様な大人たちの存在を認知し、地域のさまざまな大人たちに見守られながら遊ぶことができるようになってきていること、また広場に集まる大人たちと接することで自然と人と関わる力を養っていける場となっていることは、一つの成果であるといえる。

また、自然資源の活用をコンセプトの中心に据え、地域内の資源循環や土壌改良を体感できる場づくりになっている点も多くの方々に関心を示していただく要因になっている。ここまでの期間で実感できている強みを一層強化し、子どもの居場所としての役割を担える拠点に育てていきたい。

## 今後の展望

地元の小学生や小さな子どもを抱える子育て世代からの認知を得られている一方、子ども第三の居場所事業の一つの目的である課題のある子どもたちの発見やケアには至っていないのが現状である。今後は学校や社協などと積極的に連携し、定期的に情報交換の機会を設けられる協力体制を構築することで、課題を抱えた子どもたちへのアプローチを強化したい。また、現状は高齢者や中学生以上の若者世代の利用は限定的で、広場の目的の一つに掲げている”大人の居場所”としての役割は担いきれていない点が課題である。さらに、運営資金を頼った運用になっていることも課題となっており、ファイナンス面の検討が急務となっている。

大人の居場所としての役割を果たすため、3年後の自走に向けた仕組み構築のため、有志の地域住民による「運営コミュニティ」の仕組み導入に挑戦する。広場に主体的に関与する地域住民が運営コミュニティのメンバーとして登録・出資参画し、広場のルール検討や運営方法の検討に意思決定者として参画する仕組みである。運営に関わる地域住民を増やすことにより、運営コストを最小化しつつ、出資を募ることで継続的に運営ができる体制を構築する。導入実績のないアプローチであり、さまざまな課題があると考えられるが、3年後の自走に向けた仕組み構築のため、知恵を絞りたい。